様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１５２０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７２０４２８

研究課題名（和文）老いとケアに関する文化人類学的研究

研究課題名（英文）Anthropological Study on Aging and Care

研究代表者
福井　栄二郎（FUKUI, Eijiro）

島根大学・法文学部・准教授

研究者番号：１０５３３２８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,100,000円、（間接経費）　930,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は「老いるとケア」について、文化人類学的に探究するものである。全世界的な人口高齢化時代に突入するにあたって、「ケア」の文化的多様性を視野に入れた包括的「ケア論」を構築し、その将来的ヴィジョンを再考する必要に、われわれは迫られている。こうした背景のもとに、本研究ではヴァヌアツ、日本、北欧などで文化人類学的なフィールドワークを行い、老いとケアに関する文化的特性を明らかにし、ケアに関する包括的な理論を構築する。

研究成果の概要（英文）：This study aims to make anthropological considerations of aging and care. On encountering the global scale problem of exponential aging, we need to construct a comprehensive approach to care theory taking account of cultural diversities, and to rethink the vision for the future. It is intended in this study to reveal the cultural characteristics of aging and care, and to construct the comprehensive theory of caring based on my fieldwork in Vanuatu, Japan and some Nordic countries.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：ケア　文化人類学　ヴァヌアツ　北欧　高齢者　人格

１．研究開始当初の背景

（１）　人口学的にいえば、世界中で高齢者として定義される人口の比率が、1998 年の10%から2025年には15%に増加すると見込まれている。また、欧米諸国と比べ、アジア、アフリカ、太平洋地域などのいわゆる「開発途上国」では、その増加率が急増することも指摘されている。他方、日本でも、高齢化率（人口全体に占める 65 歳以上の割合）が21%を超え、世界有数の高齢人口国家となった。

　こうした高齢者や社会福祉全般を考える上で、重要になるのが「ケア」という概念である。たしかに「ケア」をめぐっては学術的、学際的な研究が盛んにおこなわれている。それは包括的に「ケア学」と称されることもあるが、内実は医学、看護学、社会福祉学、心理学、社会学などが主流をなしている。そしてそこでは、「ケア」とは「ケアする者とされる者との親密な関係性」と定義され、ケアされる人の「その人らしさ」や「アイデンティティ」、「ニーズ」がいかに保持されるかに終始してしまうことが多い。

（２）　だが、「アイデンティティ」や「ニーズ」といった概念そのものが、すこぶる西洋的、現代的な「発明」であることを失念してはならない。そしてその現代的概念を基点にケアそのものを論じても、おそらく明らかになるのはせいぜい「今の私たちにとってケアとはどういうものか」、「近い将来、私たちはどのようなケアを望んでいるのか」という点のみである。多くの社会学者はこの点に盲目である。他方、「アイデンティティ」というような言葉が作り出される以前も、あるいは「ニーズ」という概念がない文化にも「現前の他者を支えよう」という行為や考え方は存在していたに違いない。つまり「ケア」そのものを再考するにあたって「いま・ここ・わたし」ではないところから思考されなくてはいけないのである。しかし小規模国家（社会）の高齢者が、どのような位置づけをなされ、どのような暮らしをし、ライフスタイルを送っているのか、これまでほとんど理解されることがなかったのが現状である。

（３）　そこで文化人類学的なアプローチが重要となってくる。だが文化人類学においても、これまで高齢者が研究対象として扱われることは稀であった。シモンズの比較研究を嚆矢として、若干の報告はあるものの、その多くは各地域社会の現状を概観し、高齢者の役割、肯定的な意義を述べるにとどまっていた。つまり、西洋近代社会では高齢者は「お荷物」になるが、伝統的小規模社会では、豊富な知識ゆえに尊敬される存在であるという、単純なステレオタイプに基づくものが多く、「ケア」をめぐる包括的な理論構築には至っていないのである。

　申請者はこれまで、高齢者に関する文化人類学的研究を遂行してきた。また、現地調査も南太平洋のヴァヌアツ共和国、北欧、日本と広範に実施し、その知見を深めてきた。その中で明らかになったのは、高齢者に対する社会的ポジションの多様性であり、「老いのリスク」に対する構え方の多様性であった。しかし、老いた後のケアの重要性に関して、文化的多様性を視野に入れた包括的な議論は、まだ遂行されていない。そしてそもそも「ケアとは何なのか」というより根源的な議論もなされていない。今後、世界的な高齢化問題に直面するにあたって、私たちは早急に、この「老いとケア」の問題を文化人類学的に解明する必要に迫られているのである。

２．研究の目的

　上述の問題関心を踏まえ、本研究では以下の 3 点を明らかにする。

Ⅰ　老いとケアに関する文化的特性

　当該社会において、何が「ケア」として認知されているのか。社会的言説のレベルから、老いとケアの関係を浮き彫りにする。

Ⅱ　授受されるケア

　当該社会の人々は、高齢者に対してどのように「ケア行為」を授受しているのか。現地調査を踏まえて、人々の実践レベルから明らかにする。

Ⅲ　ケアに関する包括的な理論構築

　上記２点を踏まえつつ、多様な文化を比較検討することによって、老いとケアに関する、より包括的な理論を構築する。

３．研究の方法

　本研究は大きく、①現地調査（文化人類学的参与観察）と、②文献・理論研究に大別される。

　①現地調査は、国家による社会福祉制度が整備されている地域（デンマーク、スウェーデン、日本の都市部、米国ハワイ州）と、親族関係など伝統的な社会関係が、セーフティネットとして機能している地域（ヴァヌアツ、日本の過疎地域）において行った。

　そこでは高齢者の問題を中心に聞き取り調査を行い、「高齢者にとって大切なこととは何なのか」を中心に、当該社会の人びとにインタビューした。

　②文献調査に関しては、哲学・社会学・文化人類学で議論されてきた人格論と名前の議論を中心に用い、そこで展開されている「かけがえのなさ」という概念をケアの本質と位置付けた。

４．研究成果

（１）　2011 年に上梓された上野千鶴子の『ケアの社会学』は、日本の高齢者ケア研究の、ひとつの到達点だといえる。彼女の研究を貫いているのは、「反・家族介護」である。それまで家庭のなかで、それも女性にのみ押しつけられていた介護を、社会や国にも負担してもらおう。2000 年に開始された介護保険

は、たしかにそういう意図で開始されたものであるし、介護を考えるうえで、大きなターニングポイントになった。
しかし介護を「外部発注」するというのは、多かれ少なかれ、そこに「市場経済」というファクターが入ってくるということでもある。いわば、現金との交換である。もちろんある程度、介護保険を市場経済的なマインドで語ることはやむを得ないと思う。しかし市場交換では、その代価として水に流してしまうものもあるのだ。
本研究は、この上野の論への違和感とその文化人類学的な超克を目指してきた。

（２）　文化人類学的知見からいえば、交換にはふたつのタイプがある。ひとつは「市場交換」で、もうひとつは「贈与交換」と呼ばれる。前者は、例えば店での買い物であり、現金と商品を交換する。後者は、いわばプレゼント交換である。どちらも「交換」であることに変わりはないのだが、ルールが異なる。
プレゼントでは「誰が」ということが重要である。誰が作ったのか、誰が贈ったのか、誰が受け取ったのか。そこに込められているのは「人格」と言い換えてよいのかもしれない。逆に、誰が贈ったかわからないようなプレゼントというのは、とても薄気味悪く感じてしまう。他方で、市場交換には「誰が」ということは関係がない。コンビニで商品を買うとき、店員が誰であるとか、商品は誰が作ったかとか、そういうことは問題にならない。むしろ「誰」は顔を出してはならず、いわば匿名性のなかで、黙々と交換しなくてはいけない。
では、ケアはどうか。上野はいう。「ケアの受け手が、職業的なケアの与え手に人格的な関係を求めることもある。だがヘルパーに人格的な関係を求めても、お門違いというものだろう」。つまり、ケアの実践は市場交換のルールで行うべきだと彼女は主張する。だが、私たちはコンビニでのやりとりと同じように、ケアの現場に「誰」を持ち込んではいけないのだろうか。

（３）　本研究を遂行するに当たり、私が滞在していたヴァヌアツの離島は人口が 900 人である。電気もガスも水道もなく、みなが顔見知りで助け合いながら自給自足の生活をしている。現金がそれほど生活の真ん中に居座っているわけではなく、大切なのはむしろ人間関係。島にはひとつだけ施薬所があるけれども、ここで治療できる病気は限られていて、大きな病気やケガは首都の病院まで赴かなくてはならない。
この社会ではだいたい 60 歳を過ぎれば「高齢者」の域なのだが、畑仕事ができるうちは、毎日畑に出る。それでも 70 歳を過ぎるとそれほど遠出や力仕事はできないし、ヤシの木にも登れない。必然的に、家にいる時間も多くなってくる。そして食事や排泄がうまくできない高齢者も少なからず存在する。こうした高齢者の世話は、近親者（子どもたちやその配偶者）が行うことが当たり前と考えられている。
だが、たとえ老衰しても、概して高齢者への処遇は悪くないし、子世代も敬意をもって接している。私のホームステイ先の「家族」はみな口をそろえて言う。「俺たちが老親の面倒をみるのは当たり前だろう。これまで育ててもらったんだから」。では、老後の不安はどうか。「子どもたちが面倒みてくれるから心配はないよ」。大勢いる子どもたちは、その数がそのままリスク回避のセーフティネットになっている。ここには面倒をみてくれる国も自治体もなければ、NGO もボランティアもない。いわば「公助なし、共助なし、自助 100%」の世界である。さらにいえば、ベッドもストレッチャーも手すりも車いすもない。医師も PT も OT もいない。日本のケア従事者がこの島の介護を見たら、あるいは驚愕するかもしれない。けれどもそこに暗さはない。高齢者たちはみな大過なく過ごしており、名前と人格を持ったひとりの島民として人生を最期までまっとうする。
断っておくと、彼らは特別、親切心に篤いわけではない。その証拠に、自分の近親でもない高齢者の介護を行うわけではない。彼らが面倒をみるのは、あくまでも血縁や婚姻でつながった親族だけである。だがそれは、彼らのケアには常に「誰」が刻印されているということでもある。それはプレゼントと同じように「与え手」「受け手」が明確であり、匿名ではあり得ない。また彼ら自身の言明にもあるように、自分への介護は、下の世代がやってくれるだろうという期待もある。つまり老親の世話は、世代を超えた「贈与」でもある。
先にも述べたとおり、贈与は人格を担保する。あるいは贈与としてのケアは、人間関係や社会のなかに埋め込まれているともいえる。

（４）　他方、北欧社会の調査で明らかになったのは、ヴァヌアツとはある意味で真逆の社会制度を有しているということである。医療、教育、子育て、福祉など様々な分野で国や地域が介入しており、「自助」よりも「公助」「共助」の割合が大きい。高齢者のケア、例えば親の介護にしても、「できるところまでは自分たちで」とはいうものの、実際、老親の世話のために自分たちの生活を犠牲にしようとまでは思わない。それだけ「公助」「共助」のシステムがしっかりしているということである。
視察で訪れたスウェーデン、デンマークの高齢者入居施設で感じたことは、「人」と「生活」を大事にしているということである。入居の際には、その人が長らく使っていた家具や道具が持ち込まれる。食事の形態も時間の使い方も、ある程度は選択できる。趣味の園

芸に時間を費やし、夜にはワインを嗜む。つまりそこで重きを置かれることは、ただ単に生命を長らえることではなく（より強い言い方をすると「死なさない」ことではなく）、主体的によりよく「生きる」ことである。周囲は、その人の生活や意向や尊厳を最大限に尊重しなければならない。

たしかに北欧のケアは近親者への「贈与」ではないし、国からのサービスである以上、個々のケアワーカーの「誰」は消失している。さらにいえば、北欧諸国といえども財政の面、システムの面で問題は山積しており、決して「夢の国」ではない。だが、それでもケアの受け手の「誰」は明確に保持されている。むしろ、彼らが名前や顔を持った「オンリーワン」であることを保持する行為こそが「ケア」なのかもしれない。

（５）　こうした海外調査も踏まえ、日本のケア現場における現状の考察も行った。2000年の介護保険以降、介護は市町村がある程度負担してくれることになった。だが他方で、興味深い資料を湯浅誠は報告している。ある調査機関が、世界 47 カ国の人を対象に「政府は、自力で生活できない人に対応する責任があるか」と尋ねた。その結果、「全く思わない」「ほとんど思わない」人の合計の割合が以下のようになった。米国 28%。フランス 17%。韓国 12%。中国 9%。インド 8%。ドイツ 7%。日本は 38%だった。

この数字をどう捉えればよいのかは、私自身よくわからない。「これ以上の高負担はたくさんだ」という泣訴かもしれないし、あるいは「介護や生活保護は家族で何とかするのが当たり前」という見解かもしれない。もちろん湯浅はこの数字から「困窮者を支えるのは誰か」という問いを発している。それはそれで正しい。しかし暴言かもしれないが、その問題はたいしたことではなく、国が負担しようが、家族が支えようが、NGO に助けてもらおうが、要はみなが大過なく過ごせればそれでいい。ただしその際、絶対に看過してはならないのが「人格」なのである。本研究で調査した、ヴァヌアツ、ハワイ、日本、北欧、それぞれの諸地域で、「ケア」がうまく実施されているところというのは、必ず「人格」がきちんと保持されていた。換言すれば、人格を他人が保持する行為こそ「ケア」なのだということができる。

介護をビジネスの用語で語ってしまうと、「人格」が捨象されてしまう。そこでは「私」は「私」である前に「入居者様」であり「患者様」であり、ひいては匿名の「お客様」なのだ。「誰」ということは考慮されない。「その人にその人らしいケアを」という文言は、おそらく福祉関係のどの教科書にも書いてあることだろう。このケアの基本を単なる美辞麗句で終わらせることなく、実践できるかできないか。日本のケアの現場が問われているのは、そのあたりなのかもしれないと本研究では提言した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
① 福井　栄二郎、「誰」が問われるケア――文化人類学の視点から、地域リハビリテーション、査読無、8 巻 2 号、2013、pp．148-151
② 福井　栄二郎、「人格」の手前にあるもの――ヴァヌアツ・アネイチュム島からみるかけがえのなさ、南方文化、査読有、39 輯、2012、pp．1-22
③ 福井　栄二郎、名の示すもの――ヴァヌアツ・アネイチュム社会における歴史・土地・個人名、文化人類学、査読有、77 巻 2 号、2012、pp．203-229
④ 福井　栄二郎、老人が排除される日――ヴァヌアツにみるふたつの「老人問題」、歴博、査読無、172 号、2012、pp．11-14

〔学会発表〕（計２件）
① 福井　栄二郎、比較された「楽園」・類化された「伝統」――ヴァヌアツ・アネイチュム観光からみるグローバリゼーション、日本文化人類学会第 48 回研究大会、2014 年 5 月 17 日、幕張メッセ（千葉県）
② 福井　栄二郎、ケアと人称性、シンポジウム「いま、北欧ケアを考える」、2013 年 3 月 16 日、大阪大学中之島センター（大阪府）

〔図書〕（計４件）
① 福井　栄二郎　他、科学研究費補助金研究成果報告書（未刊行）、いま北欧ケアを考える、2013、237 頁（37-48）
② 福井　栄二郎　他、昭和堂、オセアニアと公共圏――フィールドワークからみた重層性、2012、274 頁（107-123）
③ 福井　栄二郎　他、風響社、グローカリゼーションとオセアニアの人類学、2012、340 頁（75-302）
④ 福井　栄二郎　他、ミネルヴァ書房、よくわかる観光社会学、2011、216 頁（196-197）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://www.ipc.shimane-u.ac.jp/anthro/fukui.html

６．研究組織
(1)研究代表者
福井　栄二郎（FUKUI Eijiro）
島根大学・法文学部・准教授
研究者番号：１０５３３２８４

(2)研究分担者
なし

研究者番号：

(3)連携研究者
なし

研究者番号：